いま日本でアーレントを読むということ

Arendt lesen jetzt in Japan

矢野　久美子
Kumiko YANO

1．問題の所在

2011年12月、ドイツのシュトゥットガルトにあるメッツラーMetzler出版社から、同社の事典シリーズの一つとして、407頁2段組の『アーレント・ハンドブック』が公刊された（Heuer［2011］）。この企画の中心となったのは、編者であるホイヤーHeuer、ハイターHeiter、ローゼンミュラーRosenmüllerを初めとするベルリンのアーレント研究グループで、ドイツ、フランス、スイス、スペイン、スロヴェニア、ノルウェー、イギリス、イスラエル、アメリカ合衆国、メキシコ、ブラジル、日本などに在住する51名の研究者が各項目を分担執筆した。2007年に正式に企画が立ち上げられた本書は、アーレントの思想を総合的に包括する取り組みとしては、世界最初のものとなった。2003年にオルデンブルク大学のハンナ・アーレント・センターを中心として立案されていた、遺稿をふくむアーレント著作集は、その後補助金の問題などにより迷走し、いまだ案がまとまっていない。1990年代半ばから、書簡や未公刊の草稿の出版が英語およびドイツ語で進められてきたが、著作のまとめ方などでの相互の整合性があるわけではない。アーレントの著作に関しては、英語版とドイツ語版のどちらをアーレントが先に書いたか、そしてそれを自身で翻訳したか（後から彼女が自身でドイツ語に翻訳した場合はかなりの加筆や変更が見られる）、あるいは他者による翻訳の場合でも彼女自身のチェックが入っているかどうかなどによって、扱いに違い

を必要とする。共通の典拠となる全集がないことは、無視できない研究上の問題となってきた。

このような状況のなかで達成された『ハンドブック』の公刊は、ドイツ語であるために読者が限られているとはいえ（英語への翻訳が検討されていると聞く）、大きな意義をもつものである。編者三人の友人として最初からそのプロセスを見てきた者として、私は率直な喜びと編者の驚異的な努力への賞賛を表したい。

しかし、その一方で惜しまれることがある。それは、『ハンドブック』の事項のどの部分にも、アーレントの思想における「技術」の問題に関する論稿、それに準ずる解説が入らなかったことだ。このことをとりわけ私が強く感じるのは、2011年3月の大震災以後の日本でアーレントを読んでいるからだと思う。震災・原発事故の後、しばらく研究が手につかなかった。その後、最初に目に入ってきたアーレントの言葉は次のものだった。「問題は……地上のあらゆる有機的生命を絶滅しうる状況にあるわれわれが……新しい科学的認識や途方もない技術的能力をこの方向に動かすことを望むのかどうかということである。……いずれにせよこの問いは、第一級の政治的問題であり、このことからしても専門家たちには、職業的科学者にも職業的政治家にも、その決定をゆだねておくことはできない」（Arendt［1981：9］）。1958年に英語版が、1960年にアーレント自身の翻訳によるドイツ語版が出された『人間の条件』の問題意識は、こうした「現在的状況の経験と懸念によって」（Arendt［1981：12］）導かれていた。

ハイデガー、そして同じくハイデガーのもとで学んだアンダース Anders やヨナス Jonas とならんで、アーレントも、その思索の重要な部分で、現代科学や原子力産業がもたらす世界の破局という危機意識を共有していた。アーレントは自身の専門分野をあえて「政治理論」と限定するようなところがあるので、主要著作において「技術」の問題が正面から論じられることはない[1]。と

はいえ、いわばハイデガーの影響をうけた人びとのあいだに響く通奏低音のようなものとしての、「自然」の問題、たとえばアーレントと核の問題に関しては、数々のアーレント研究でも言及されていないわけではなかったし[2]、私もそれに取り組んだことがある。しかし、自省の念を込めて言えば、あくまでも議論の一部として言及するにとどまり、私たちはまだまだその現代的な重要性を考えぬくことを怠ってきたのではないか、と思わざるをえない。管見のかぎり、この論点が世界中のアーレント関連のシンポジウムで大きく取り上げられたことはない。国際的なアーレント研究が、それを主要な論点として論じてこなかったのは、現代世界にたいするアーレントのまなざしを共有しきれていなかったせいではないか、狭い意味での学術的研究だったからなのではないか、と痛感する。人権や市民権に関する議論、政治や文化に関する議論では、他の思想家とくらべてアーレントは、学術的な世界を越えて受容され、読まれ、語られてきた。それにもかかわらず、この技術をめぐる論点が抜け落ちていた。日本では、山之内をはじめ（山之内［2007、2010］）、ハイデガー研究者でもある森が大切な指摘をすでにおこなっていたのであったし（森［2003、2010］）、アーレントへの言及はないが、市村はアーレントと同じ「戦争」という言葉で原発と隣合わせの生を表現していたのであった（市村［1992］）が、私はこうした議論をつなげることができないでいた。小論は、不十分ながらも現時点でこの問題を考えて「理解する試み」として発信することを、震災直後に心配と共感を私に表してくれたドイツの友人たちへの、一つの義務と感じている[3]。

2．『人間の条件』*The Human Condition* あるいは『活動的生』*Vita activa*

バリバール Balibar の明快な表現にしたがえば、「アーレントはけっして同じ本を二度書かなかったし、それ以上に、けっして

同じ観点から続けて本を書くこともなかった」(Balibar [2007 : 261])。カノヴァン Canovan が述べるように、そのなかで最も広く読まれた本は『全体主義の起原』であり、最も評判が悪いのは『イェルサレムのアイヒマン』であり、最も学問的な注目を集めたのが『人間の条件』であった。『人間の条件』で展開された「労働」「仕事」「活動」という概念区分、「社会的なもの」と「政治的なもの」、「私的領域」と「公的領域」といった対概念は、学際的に注目を集め、論じられてきた。

まずここでは、『ハンドブック』でこの書の項目を担当しているクノット Knott による概説も参考にしながら、その受容史を見ておこう (Heuer [2011 : 61-69])。『人間の条件』にたいする最初の反応は、そこで展開される「近代批判」、「反近代的でノスタルジー的な側面」を強調するものだった。アーレントは古代ギリシアにおけるポリスの経験を「政治的なものの本質的経験」および「規範的尺度」と見なし、それによって近代の政治を測定しようとした、という理解である。この議論によって、ハイデガーやニーチェに通じるエリート主義的で反近代的なアーレント像が構築され、アーレントによる現代技術批判も、古典古代の輝かしいポリスを賞賛する思想家による「政治的なものの没落の物語」に吸収されることになる[4]。

1990 年頃まではこのような解釈が「標準的解釈」となっていたが、1989 年の「ビロード革命」と「東ヨーロッパの全体主義時代の終焉」に連動して、アーレントの自由論や「始まり」の議論と全体主義論との関連、すなわちアーレントの思想展開における『全体主義の起原』と『人間の条件』の関係性が問われるようになってくる。その問題連関から、アーレントのマルクス研究や「政治とは何か」といった未公刊の講義や草稿が研究対象となってきた。この方向性を切り拓いたのはカノヴァンが 1992 年に出した『アレント政治思想の再解釈』(カノヴァン [2004]) である。

マルクス主義をふくむ全体主義的要素との対峙という観点からアーレントの政治思想を再解釈したカノヴァンは、『人間の条件』は「政治よりも政治が始まるはずのところの苦境に関わっている」(カノヴァン [2004:132]) とし、アーレント自身がその書を「彼女の政治理論の決定的表明とみなさず、むしろ政治に最も関係があり、最も誤解されてきた人間の活動力についての研究とみなした」と指摘する (カノヴァン [2004 : 134])。

カノヴァンは、小論にとって重要な議論を展開している。それは、アーレントが語った「自然的なものの不自然な成長」としての「近代性の物語」に注目したことである。アーレントは、『人間の条件』の第2章「公的領域と私的領域」の6「社会的なものの勃興」のなかで、近代における「労働生産力の恒常的・加速的な上昇」を「自然的なものの不自然な成長」と定義した (Arendt [1981:47-48])。それは、機械の発明によって始まったのではなく、産業革命に先立つ「労働の組織化」=「分業」によって始まった。「労働の組織化」は、自然の循環過程に属していた生産や消費が、「組織化の原理」という本来公的領域のものである活動力となることを意味し、生産における近代的膨張をもたらした。それは同時に、画一的な行動が主となる「賃仕事人」や官僚制的「社会」が、私的領域や公的領域を収奪していく「成長」であり、人間が「世界にたいする配慮や世話から遠ざけられる」富の蓄積過程であった (Arendt [1981:250])。自然の生命過程は循環的ではなくなり、無制約な軌道の上に放たれた。カノヴァンは、アーレントがこの「自然的なものの不自然な成長」を、「社会の生命過程」だけでなく、核テクノロジーや全体主義においても「著しく加速されてきた諸力」として見たことを強調する (カノヴァン [2004 : 113])。

> アレントの観点からは核テクノロジーは自然のなかに活動していくこと、すなわち新しい過程を始め、人間と自然との関

係のなかに以前は人間事象においてのみ知られた活動力をもち込むことを意味するのに対し、全体主義はこれを写し出した一種の鏡像である。……核物理学と全体主義は、ネメシスに出会った傲慢さの物語であるという点で、すなわち解放と権力を目指し、そして人間を保護するために必要とされた限界を破壊するであろう、自然や擬似自然の過程を解き放つことだけには成功した人びとの物語だという点で類似している（カノヴァン［2004：110］）。

全体主義は、「地球上に複数で生きる」という人間の条件を無視し、ある「人種」や「階級」が消滅すべきであるという「自然」や「歴史」の法則を体現する措置を遂行する。人間の行為がなければ起こり得なかった制御不能な原子の連鎖反応は、境界を踏み越えた人間の「活動」でもあった。両者とも「すべてが可能である」という信念によって導かれている。アーレントの「近代性の物語」は「活動の潜在的可能性と限界についての教訓」として読まれるべきである（カノヴァン［2004：131］）。カノヴァンによれば、アーレントにおいて「条件」（「人間の条件」）という語が使用される理由は、「全体主義と近代性の傲慢な幻想に挑戦し、われわれみなが逃れることのできない諸条件にゆだねられていることを強調することにある」（カノヴァン［2004：138］）。「活動」の「限界」に注目するカノヴァンは、市民としてわれわれは「どのような行為が政治ではないか」ということを自覚するべきだと言う。アーレントは、「政治は人間の複数性という事実にもとづく」と述べた。アーレントにおける「政治」は、「複数の活動者の間で生じる事柄」であり、「生死に関わる問題」であり、世代を越えて持続すべき「世界」を配慮すべきものである（カノヴァン［2004：352-353］）。そうした文脈から、アーレントは経済や産業といった「社会的なもの」が「公的なもの」を席巻することに警

鐘を鳴らしたのだった。

上述したように、『人間の条件』にたいする最初の反応に見られたような「標準的解釈」においては、アーレントの活動は英雄主義的・エリート主義的なものとして把握され、そのために、反近代性や「労働」の過小評価、社会問題・経済問題への消極的態度が、批判の対象となってきた。また、カノヴァンの強調する「自然的なものの不自然な成長」としての「近代性の物語」は強引過ぎるのではないか、と異議を唱えたくなる論者もいるだろう。しかし、カノヴァンが述べていることだが、「われわれは物語に対する疑問を留保したまま洞察から学ぶことができる」(カノヴァン[2004：358])。そのように考えるとき、アーレントの洞察は、国を挙げて生産と消費に邁進してきた戦後日本の「成長」を照らし出しているように思われる[5]。

3.「物」への配慮

市民科学者・高木仁三郎は、日本の企業や個々人が「技術」について、「技術の公共性」について考え、議論するべきであると訴え続けた人である。その高木が20代前半(1960年代半ば)に、ある原子力事業会社をやめることになった理由は、会社所有の原子炉の汚水の放射能汚染度の測定を拡大しようとしたことだった。そのときの状況について高木は次のように語っている。

> 私としては非常に強い思想的問題意識が明確にあったわけではありませんが、しかし、やはり会社で原子炉を運転させているからには、その原子炉の炉水がどのくらい汚れているのか、周辺に人が住んでいるわけですし、そういう地域で原子力に携わっている会社は自分のところの放射能汚染くらいはきちんと把握していなくてはいけないのではないかという気持ちがありました。そして、調査によって得られた結果を積

極的に社会に発表することによって会社としての社会的責任を果たしたいという、そんな意味合いがそれなりにつよくあったのです（高木［2000：44-45］）。

高木は、こうしたいわば当たり前の配慮を排除しようという状況を、企業にも個人にも見られる「議論なし、批判なし、思想なし」という「「公」のなさ」として批判し、科学や技術そのものが公共性をもつべきであると言う。そして、それは企業や組織の枠を離れて問われるべきものであり、科学者や技術者は、数字や実証性によって組み立てられる「客観性」ということにも、もっとこだわるべきだと強調した。さらには、鎌倉時代に仏像を彫った仏師は、「人びとが求める普遍性、公共性というものを体現する個人」であり、「自分の作っているものが公的な性格を持っている」という自覚をもっていたとも指摘している。そして、こうした「技術の原点」から「職工的な技術」につながっていく「技術というもののもつ公共性」への注意をうながした（高木［2000：109-111］）。

アーレントの言葉におきかえれば、高木のいう「議論」や「批判」は「活動」に、「技術」は「仕事」という人間の営みに通じるだろう。しかし、ここでは別の観点から考えてみよう。高木の姿勢に見られるような、「物」への配慮とも表現されうるような心性の、現代的状況についてである。

ハイデガーは1949年のブレーメン連続講義[6]第一講演で「物」について語った。「われわれにとって近くに有るものを、われわれはふつう、物と呼んでいる」が、われわれは「近さを熟考してこなかったのと同様に、物と物として熟考してこなかった」と言う（ハイデガー［2003：7］）。ハイデガーが例に挙げるのは水やワインを入れる瓶である。瓶は、「納めるはたらきをし」、「漏れ出るということがありうる」、「制作して立てられた容器」である。

陶工は、「空洞という手に納めることのできそうにないもの」を「納めるはたらきをするものとしてその空洞を、制作して立てて容器の形態にかたどる」(ハイデガー[2003:11])。しかし、とハイデガーは問う。物理学によれば、瓶の中は空洞ではなく「空気および空気を構成する全構成要素」であり、ワインを注ぐ場合、空気が液体に交換されるということになる。そうした「科学的表象」は、「瓶という物」を「虚無的な何かに変えてしまう」。「科学が物を決定的尺度として容認しないかぎりはそうである」と言う。ハイデガーによれば、科学による物の虚無化は、原子爆弾の爆発よりも前から始まっており、「原子爆弾の爆発とは、物が虚無化されるという事態がとっくの昔から生起してしまっていることを確証するあらゆる粗暴な証拠のうちの、最も粗暴な証拠でしかない」(ハイデガー[2003:12])。ハイデガーは、「現実」を説明しうると主張する科学の「思い上がり」と、それによる「虚無化」の「無気味」さを指摘し、「物」への思索をうながすのである。

ところで、ハイデガーはそこで「物」Dingの語源であるティングthingという古高ドイツ語の意味にふれている。古高ドイツ語のティングは、「集約・集合」という意味をもち、「話題にのぼっている関心事、たとえば係争事件の審議のために集合させる」という意味であり、その結果、古ドイツ語のティングおよびdincは「関心事を言い表す名称」ともなる。ハイデガーは次のように続けている。

> これらの古語が名ざしているのは、およそ、人間に何らかの仕方で掛かり合ってくる〈angehen〉もの、その掛かり合いに応じて話題にのぼっているもの、にほかならない。話題にのぼっているもののことを、古代ローマ人はレス〈res〉と呼んだ。……レス・プブリカ〈res publica〉という語にしても、国家という意味ではなく、人民の誰にも公然と掛かり合っ

てゆき、それゆえ公的に審議されるもの、という意味なのである。（ハイデガー［2003：28］）。

「物」は人びとに掛かり合い、公的に審議されるものであった。ハイデガーは、「われわれは、厳密な意味において、物的に－制約された〈be-Dingt〉存在」としては、「無制約的なものすべてが陥りやすい思い上がりを脱却しているはずだ」と述べる。「物的に－制約された」とは、「条件づけられた」bedingt ということである。アーレントは、「世界」を個人の生を越えて持続する「物の世界」と人びとが行為する「あいだの空間」としての「現れの空間」である「世界」とに区別して議論したが、ここでハイデガーが述べる「掛かり合ってくるもの」はその双方と連動しているだろう。森は次のように述べている。

人間はおのれの作り出した産物・人工物を、拠りどころとせざるをえない。物的世界へと差し向けられ、それに依拠していることを、人間の条件として再発見したことは、世界内存在の現象学の功績の一つであった（森［2010：47］）。

しかし、現代ではそのような「物」への配慮は失われている。ブレーメンの第二講演「総かり立て体制」Ge-stell において、ハイデガーは、人間をふくむすべてのものが「徴用して立てられた物資〈Bestand〉」となり「徴用可能な」「在庫」となる状況を語っている（ハイデガー［2003:32-59］）。大地は「鉱床地帯」として、さらに「鉱物」が「ウラン」に向けて、「ウラン」は「原子力」に向けて、原子力は「徴用可能な破壊行為に向けて」、「ライン川」は「水力発電所へ」と、自然がかり立てられる。人間もまた、その自覚にかかわりなく「労働」へと「徴用しかり立てられるはたらきによって立てられた雇われ人」となる。この「はたらき」は

「自然と歴史、つまり有るといえるものすべて」を襲う。こうした状況のもとですべては「画一的」で「代替可能な」「断片」となり、「どうでもよくなる」と言う。つまり、いっさいの配慮が失われるのである。

> 人間が、機械に奉仕するにせよ、徴用して立てる機械制のはたらきの内部で機械を設計し建造するにせよ、そうである。技術の支配する時代において、人間は、人間の本質のほうから技術の本質のうちへ、つまり総かり立て体制のうちへ、かつ総かり立て体制によって、徴用して立てられているのである（ハイデガー［2003：49］）。

この「総かり立て体制」こそは技術の本質である、とハイデガーは言う。しかも、そうした体制は、「18世紀末にイギリスで最初の動力機械が発明され機動されるよりもずっと以前から」始まっていた、と述べる。これは、前節でふれたアーレントの「労働の組織化」と呼応しあう議論でもあるだろう。そして、森が指摘しているように、この体制をアーレントが「換骨脱退した」、「近代をおおい尽くす収用過程」の別名こそが、アーレントが「近代のメルクマール」と見なした「世界疎外」であるだろう（森［2003：4］）。人間は行為のみによって人間的になるのではなく、作り出した「物」によって支えられている。レス・プブリカ、「公的に審議されるもの」によって、支えられている。そこには物体としての本もふくまれれば、語り継がれる「物語」もふくまれるだろう。自身の生を越えて「世界」で持続する「物」を作り出す「仕事」workや、そうした「世界」の物や出来事について語り行為する「活動」actionと違って、「世界」を享受したり配慮したりすることなく可能である営みが、アーレントにおける「労働」laborであった。そしてそれが「組織化」され、「成長」し、「世界」

が配慮されずに荒廃した「破局」の時代によって翻弄された生をおくった人こそ、アーレントであった[7]。

4．思考を手放さないこと

『社会の喪失』（市村／杉田［2005］）で新たに編集された市村の論稿の一つに、「日常のなかの戦争」がある。小池征人の映画『脱原発元年』（1989年）を論じたものである。それらの論稿が最初に出版された『標識としての記録』（市村［1992］）の装丁とその書のなかの本論稿の冒頭には、樋口健二による美浜原発の写真が使われている。冒頭の写真では、原発のすぐ近くの海でおそらく子供をふくむ人びとが海水浴を楽しんでいる。以前この写真を見たとき、この「距離感」に愕然とし、今回小論でふれたアーレントやハイデガーのテクストを読んでいるあいだも、そのことが頭を離れなかった。この「距離感」と「日常のなかの戦争」は、2011年3月に住む場所を奪われた福島の人びとも、日本や世界の他の場所で原発と生きる人びとも、共有しているものだろう。

アーレントは、『人間の条件』の英語版出版後、刊行にはいたらなかった草稿のなかで、「戦争の問題」という文章を書いていた[8]。そこでアーレントは、原子爆弾によって戦争の本質が「絶滅戦争」に変わったこと、そのような現代技術のもとで制作と破壊が同様の「進歩」の過程のなかにあることを指摘した。そして、そうした「絶滅戦争」と「全体主義」による「人びとのあいだに生起してきた世界全体の破壊」という破局について警告し、そうした恐怖に直面しつつ政治を考えることの意味を伝えようとした。

1992年に書かれた市村の論稿では、ヒロシマとチェルノブイリは、「戦争」概念の「決定的な変質」、「私たちの生存条件の変質」を明示している（市村［1992：87］）。「私たちの日常生活の根底に持続する戦争状態」は、原発事故によって突出すると言う。小

池の映画の力を前面に出しながら、市村は、「原発をめぐる問題が、平和のなかに持続する戦争であり恐怖であるとすれば、それを考える切り口をどこに求めればよいだろうか」と問い、「日常性」のレベルを離れずに粘り強く考えることの大切さを書く。「原発にかかわる産業構造や社会的差別の問題や技術論議もむろん大切に違いないが、何よりも原発がこの時代の人間の生活にどのようなかたちで侵入し、どのように占拠しているのかを見据えなければならない」と言うのである（市村［1992：20］）。小論でふれたアーレントやハイデガーの言葉は、この「占拠」のかたちを見据えるための一助となるだろう。「日常性との接続」は、現場にいる人びとの低い声を聞き、その行為を注視しつづけ、その状態を思考において共有することである。

私は、アーレントが「政治理論」を「物語を語ること」と言い続けたことの意味は、こうした日常性や具体性、出来事や「物」、誰にも掛かり合ってくる公的な事象から離れてはならない、ということにあるのではないか、と思う。アーレントは、「第一級の政治的事柄」を「専門家」の手にゆだねてはならない、と強調し、言葉で把握できない科学性に憂慮を示した。「複数性」を前提とする人びとのあいだに生起してきた「世界」を持続させるためには、出来事は語られ、「物化」されなければならない。親友ヨナスが、現代の科学技術によって「新しく出現した義務」として未来への「責任」を提唱する『責任という原理』（ヨナス［2010a］）の最初の論稿をアーレントに見せたとき、アーレントは絶賛したが、ふたりは相互の「哲学的な基礎づけ」の「相違について語った」という（ヨナス［2010b：288］）。そこで語られたであろうこととは違っているだろうが、アーレントが「思索日記」でヨナスにふれた箇所を引用しておこう。

理解すること：いつも変らぬ人間の自然と一度かぎりの歴史

性のあいだのディレンマ、同じものを理解することと別のものを理解することのあいだのディレンマに抗して。われわれが理解するのは、アキレスではなく、歴史、物語（ストーリー）である（Arendt［2002：720］）。

これは、アーレントが「全体主義を理解する」試みの時点から手放さなかった立ち位置でもあった。いま日本でアーレントを読むことは、ディレンマに自覚的でありつつ出来事から目をそらさないこと、理解しようと努力すること、記憶にとどめること、「物」そして「日常性」に「接続」しながら理論と現場のあいだで考え続けることでもあるだろう。

【注】

1　タイトルにこのテーマがかかげられた論稿には、『過去と未来の間』のなかの「宇宙空間の征服と人間の身の丈」、『政治思想集成２』におさめられている「ヨーロッパと原爆」がある。

2　核の問題を論じたものとしては千葉論文（千葉［1997］）、アーレントの「技術嫌い」を論じたものとしては増田論文（増田［1997］）がある。カノヴァンは、「核テクノロジーは自然のなかに活動していくこと」というアーレントの指摘を「自然的なものの不自然な成長」というアーレントにおける「近代性の物語」（カノヴァン［2004：110-145］）として位置づけ、その「物語」に注目した。ヴィラはアーレントの思想における「テクノロジー資本主義と全体主義の相似性」を指摘している（ヴィラ［2004：281-282］）。しかしこの点に関して最も明快で説得力があるのは森の論稿である（森［2010］）。

3　小論の一部はドイツ語でハンナ・アーレント・ネットのニューズレターに投稿を予定している。　http://www.hannaharendt.net/

4　たとえば注１で挙げたヴィラの議論もその一つだと考えざるをえない。

5　アーレントは戦後ドイツの「経済の奇蹟」について、現代世界では「破壊」も「富の急激な蓄積過程を刺激」するものであり、耐久的な物の価値の低落と浪費経済の急速な展開が「繁栄ブーム」をもたらしたと述べている。「現代経済を台無しにするのは、破壊ではなく維持や保存である」

(Arendt [1981：248])。

6　1919年12月にブレーメンのクラブでおこなわれた、「物」「総かり立て体制」「危機」「転回」は、第2次世界大戦後はじめてハイデガーが公的に姿をあらわした場面を伝えるドキュメントである（ハイデガー [2003：227]、編者後記、参照)。本講演の訳者森によれば、「ナチズムの台頭、第二次世界大戦、ドイツ壊滅、原爆投下、といった未曾有の出来事を、ときには身を以て経験し、また思索の糧としてきた哲学者が、その並々ならぬ思いをテクノロジー論に結晶されて、衝撃的な再デビューを飾った文字通りの問題作」であり、「一部は生前公刊を差し控えられたと見られる」ほどだったという（同 [233]、訳者解説、参照)。1933年にナチに加担しフライブルク大学総長となったハイデガーが、本連続講演（第2、第3講演）で「絶滅収容所」に言及し、「機械化された食糧産業」としての農業と「ガス室や絶滅収容所における死体の製造」を同列に論じたことは、多くの論客によって非難された（森 [2003：1-2])。

7　森川は、「労働」と「現代技術の本質」をめぐってアーレントがハイデガーの思索を引き継ぐとしながらも、ハイデガーが「食糧産業」における「食品の製造」と「絶滅収容所における死体の製造」を同列に論じたことに注意をうながし、「絶滅収容所と食品工場との巨大な深淵を看過してしまうことこそ」、アイヒマンのような「勤め人」の「思考のなさ」に通じると述べている（森川 [2010：256-260]、参照)。

8　ルッツによれば、この草稿は「政治にはまだ意味があるのか」というテーマで1959年に書かれた論稿の一つである（Arendt [1993：80-82, 138-141]、参照)。

【参考文献】

H・アーレント　1994a『過去と未来の間』引田隆也・齋藤純一訳、みすず書房。

H・アレント　1994b『人間の条件』志水速雄訳、筑摩書房。

H・アーレント　2002『アーレント政治思想集成 1・2』齋藤純一・山田正行・矢野久美子訳、みすず書房。

H・アレント　2008『政治の約束』高橋勇夫訳、筑摩書房。

H・アーレント / M・ハイデガー　2003『アーレント＝ハイデガー往復書簡』大島かおり / 木田元訳、みすず書房。

市村弘正　1992『標識としての記録』、日本エディタースクール出版部。

市村弘正 / 杉田敦　2005『社会の喪失』、中央公論新社。

S・ヴィエッタ　1997『ハイデガー：ナチズム / 技術』谷崎秋彦訳、文化書房博文社。
D・R・ヴィラ　2004『政治・哲学・恐怖――ハンナ・アレントの思想』伊藤誓 / 磯山甚一訳、法政大学出版局。
小野紀明　2010『ハイデガーの政治哲学』、岩波書店。
M・カノヴァン　2004『アレント政治思想の再解釈』寺島俊穂 / 伊藤洋典訳、未来社。
高木仁三郎　2000『原発事故はなぜくりかえすのか』、岩波書店。
千葉眞　1997「核兵器の出現と人間の自由――アーレント政治哲学の一局面」『現代思想』第25巻8号、青土社。
J-P・デュピュイ　2011『ツナミの小形而上学』嶋崎正樹訳、岩波書店。
M・ハイデッガー　2003『ブレーメン講演とフライブルク講演　ハイデッガー全集第79巻』森一郎 /H・ブフナー訳、創文社。
M・ハイデッガー　2009『技術への問い』関口浩訳、平凡社。
P・ブルデュー　2000『ハイデガーの政治的存在論』桑田禮彰訳、藤原書店。
中野佳裕　2011「生まれてくる生命を支える社会を創る」『世界』817号、岩波書店。
増田和夫　1997「テクノフォビアの思想――ハンナ・アーレントと政治の救済」『現代思想』第25巻8号、青土社。
森一郎　2003「戦慄しつつ思考すること――ハイデッガーと「絶滅収容所」」『創文』452号、創文社。
森一郎　2010「死を超えるもの――「メタ死生学」試論」『哲学』第61号、日本哲学会。
森一郎　2008「労働のゆくえ――「ハイデガーからアーレントへ」の途上」千田義光 / 久保陽一 / 高山守編『講座　近・現代ドイツ哲学Ⅲ ハイデッガーと現代ドイツ哲学』理想社。
森川輝一　2010『〈始まり〉のアーレント――「出生」の思想の誕生』、岩波書店。
山之内靖　2007「〈講演記録〉「マルクスとウェーバー」からハイデガーへ」2006年度フェリス女学院大学学内共同研究報告書『都市的遭遇とコスモポリタンな社会をめぐる学際的研究』、フェリス女学院大学。
山之内靖　2010「近代の歴史的終焉とどう取り組むか」山之内靖・島村賢一編『21世紀への挑戦①　哲学・社会・環境』、日本経済評論社。
山本義隆　2011『福島の原発事故をめぐって――いくつか学び考えたこと』、みすず書房。
矢野久美子　2004「ハンナ・アーレントと自然――「文化の危機」の観点か

ら」『国際交流研究』第6号、フェリス女学院大学。
H・ヨナス　2010a『責任という原理――科学技術文明のための倫理学の試み』加藤尚武監訳、東信社。
H・ヨナス　2010b『ハンス・ヨナス「回想記」』盛永審一郎・木下喬・馬渕浩二・山本達訳、東信社。
J-F・リオタール　1992『ハイデガーとユダヤ人』本間邦雄訳、藤原書店
Arendt, Hannah 1958. *The Human Condition*, The University of Chicago Press.
Arendt, Hannah 1981. *Vita activa oder vom tätigen Leben*, Piper Verlag.
Arendt, Hannah 1977. *Between Past and Future*, Penguin Books.
Arendt, Hannah 1993. *Was ist Politik?* herausgegeben von Ursula Ludz, Piper Verlag.
Arendt, Hannah 1994a *Zwischen Vergangenheit und Zukunft*, Piper Verlag.
Arendt, Hannah 1994b *Essays in Understanding 1930-1954*, Schocken Books.
Arendt, Hannah 2002. *Denktagebuch I・II*, herausgegeben von Ursula Ludz und Ingeborg Nordmann, Piper Verlag.
Arendt, Hannah 2005. *The Promise of Politics*, edited and with an introduction by Jerome Kohn, Schocken Books.
Balibar, Etienne 2007. "(De)constructing the Human as Human Institution. A Reflection on the Coherence of Hannah Arendt's Practical Philosophy," in: Heinrich-Böll-Stiftung(Hg.). *Hannah Arendt: Verborgene Tradition: Unzeitgemäße Akutualität?* Akademie Verlag.
Harms, Klaus 2003. *Hannah Arendt und Hans Jonas: Grundlagen einer philosophischen Theologoe der Weltverantwortung*, WiKu-Verlag.
Heidegger, Martin 1994. *Bremer und Freiburger Vorträge*, herausgegeben von Petra Jaeger, Vittorio Klostermann.
Heuer, Wolfgang / Heiter, Bernd / Rosenmüller, Stefanie (Hg.) 2011. *Arendt Handbuch: Leben-Werk-Wirkung*, J.B.Metzler.
Horster, Detlef (Hg.) 2006. *Das Böse neu denken*, Velbrück Wissenschaft.